

農家さんにお話を聞いてみました。



土屋 真吾 shingo tsuchiya

自分が目指している農業と向き合い、それを表現していく。

十数年前に、東京から札幌に仕事の転勤で引っ越してきて、住み始めた家にたまたまあった小さな畑での家庭菜園が、今、農業をしているきっかけです。それまで農業に興味はなかったのですが、家族が「おいしい!」と言ってくれたこともあって、次第にのめり込んでいきました。自分で種を採ったり、肥料を作ったりするようになるうちに、農業を一生の仕事にしたいと思うようになり、農業の研修を受ける為に4年前に安平町にきました。農業を志すと決めるときから有機農業というのは自分にとって自然な選択でした。無農薬、無化学肥料は勿論ですが、出荷するにあたっては味や見た目も、より良いものを目指しています。

農家になる前は、道の駅の直売所巡りをするのが好きだったので、どのような直売所が面白かったかという視点は大事にしています。普段使いのできる定番の野菜を揃えておくことが第一ですが、その他にちょっと珍しい野菜があると面白いですね。新品種や外国の野菜も面白いのですが、私は日本の伝統野菜や在来種などの固定種に興味があるので、そういったものを出していけたらと考えています。ベジステは、直接お客さんの声が聴ける貴重な場所であり、出荷している他の農家の方の野菜も私にとっては勉強させてもらう材料です。

自分の好きな作目を、自分なりに工夫や思いを込めて作って出荷することで、自分を表現する場にもなっていると思います。



ホウレンソウの周りに生えた雑草を取る。こういう作業は多いのだそう。

横澤 和子 kazuko yokozawa

来てくれる人も、生産する自分も楽しめるように。

全く休みがないというわけではないですが、1年を通して、花卉や野菜の生産を行っています。花や野菜も生き物なので、全てが想定どおりに進む訳ではなく、中には想定外の悲しい結果になることも。それでも、作ったものが誰かの手に渡り、誰かの笑顔になっていると思うと農業は楽しいなって。なので、今も続けられています。

ベジステができてからは試行錯誤しつつ、担当スタッフの方々とコミュニケーションを取りながら取り組んでいます。野菜も出していますが、花卉や野菜の苗の出荷の割合が多いです。苗に限った話しではないですが、ベジステに直接搬入するとお客さんの反応を直接聞けるのは、生産者としての活力にもなっています。苗の育て方や野菜の食べ方などをお客さんから聞かれるということも、大切なコミュニケーションですし、気付きのポイントで楽しいです。

最近では、現場を担当している地域おこし協力隊の遠藤さんから「こういうものが欲しい」などお客さんのニーズなどについてコミュニケーションなどを取ったりする機会も増え、新しいチャレンジにつながっていたりと、作り手としても楽しむことができている。

楽しく生産していないと、ベジステが楽しい場になることもないし、お客さんも楽しめないと思うんです。なので、農業を楽しみながら、皆さんにとっても楽しい場所を作りたいと思っています。



育てる楽しさも感じてもらえたらと、今後出荷するトマトの苗をチェック。